

---

# まじこい？他でやってください！

天叢雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まじこい？他でやつてください！

### 【NZコード】

N4155Z

### 【作者名】

天叢雲

### 【あらすじ】

テンプレな過去を持つ人付き合い苦手な主人公が乙女から逃げまくり、捕まるお話。

最初は鬱っぽいけど徐々にコメディ化します。

注意：主人公は非転生者、チートだけどあまり戦わない、合法ショ

タ + 微男の娘、かなり厨二な力を持つなどがあります。注意してね

## 受難、すたーと。（前書き）

自分の出たアイデアで書く三作目。

原作知識はつる覚えだから気を付けて！

## 受難、すたーと。

貴方にとって、力とはなんですか?と聞かれるとどう答えますか?

ある者は暴力。

ある者は自分の誇り。

ある者は自分の人生そのもの。

ある者は自分を満たすもの。

ある者は・・・。

そして僕はこう答えるだろう。何があつても揺るがない答え。

“誰かの、小さな幸せをもたらせるもの”

「・・・またやつてゐ・・・」

「キヤアアアア！川神先輩カツコいい！」

「さすがは百代さんだ！川神最強！」

いつもの日常、僕は学業をするために学校へ行く。父と母は僕を氣味悪いと捨て、今まで一人で生き、ある親切な人からの援助でこつして勉強ができるている。

通学路の途中、橋の下の川原では朝の恒例とも言える光景が広がっていた。

それは僕が通う川神学園の最強の武術家と言われる川神百代先輩。

あの人に勝ち、名を上げようとするものがこつして川神先輩に挑戦をし、ことごとく敗れ去っているのだ。

今日も川神先輩が圧勝し、倒した不良たちの鬚節をはずしたりして人間テトリスなるものをしていた。

「・・・・・・・」

僕はそれをただ、冷めた目で見ていた。

たとえ、喧嘩を売った不良たちが悪くてもあればやりすぎだ。

あんなのが最強の武術家だなんて僕は思いたくはない。

「よーしーできた！」

川神先輩は人間テトリスを完成させると蹴りで不良たちを崩した。

・・・なんであんな楽しそうに出来るか僕には理解できない。  
それにギャラリーもなぜ止めないでみんなにはしゃぐかも理解でき  
ないよ。

「・・・僕が、おかしいのか？」

こんな光景を見ると自分がおかしいのかと目眩がする。  
これが常識なら僕は非常識なのか錯覚してしまつ。

僕はそれ以上見ていられなくなり、足早にその場を去る。

「・・・またあいつか・・・」

それを川神先輩が見ていたのも僕は知らなかつた。

それが日常。僕がいつまでも馴染まない日常であり、嫌う日常だ。

「……あれ? どうしたの?」

「…川神さん…? なんで?」

「もう。私は一子、ワン子でもいこいつと言つていいでしょ?」

「…・またなの? 川神さん」

橋を急いで渡り、通学路を歩いていると一人の同級生がタイヤを引き摺りながら話し掛けてきた。

川神一子。川神先輩の妹さんで川神学園でも有名な生徒である。川神姉妹は川神学園の学長である川神鉄心の孫でもあるため、有名にならないはずはないのだが。

だが僕はどうしても川神の名を好きになれそうにない。

昔に世話になつたあの人は川神鉄心によつて殺されたから…。

「…・「めん。川神さん、もう行かなきゃ」

「え? あ、ちょっと待つてよ。」

この人は悪くない。そう思つてもやはり我慢がならない。

再び足早に歩き、川神学園に向かつことにした。

後ろで川神さんが何かを言つていたが、僕は聞こえないフリをして立ち去つた。

「・・・」

「ワンパンヘビヒツかしたのか?」

「あ、お姉ちゃん・・・またあの子と話したんだけど無理だったわ」

「あいつか・・・あんな根暗に構う必要はないんじゃないかな?」

「違うわお姉ちゃん。あの子の田・・・昔の私に似てたから放つておけなくて・・・」

「ふーん。ま、ほじほじにな

(あいつ、何かがおかしい。私でも計り知れないような力を秘めて  
いる気がする・・・戦つたひづなのだらうか?)

「よー。昨日のあれ見たか?」  
「おう。いい声してるよな~」

八時。僕は学校に間に合い、自分の教室である一年F組の自分の席で静かに本を読む。

周りは騒がしいが、僕はいわゆる人間不信一歩手前なので人付き合いは苦手だ。

だからこそ、あまり人とは関わりたくないのだが、その人と約束をしたため、学校には通っている。

「えーーーうつそーーー!  
「そうそう  
「へーまじかよー」  
「でさーー  
「でさーー」

「あのイケメンカツ」よかつたよー

・・・正直、喧しい。

人付き合いなんてあまりしたことないのに学校生活は無理があつた  
か。

「やべー。やうそろ来るぞー。」

「寝てゐるやつ起こせー！」

「おー、またD.V.D.ばなしだぞ」

「おつといけね」

クラスメイトが慌ただしく動くのは担任の教師が来るからである。  
まあ、鞭で叩かれるのは嫌だらうから当たり前だらう。

僕は読んでいた本を閉じ、付けていたイヤホンも外して鞄に仕舞つ。

「よーし。じゃあ出席を取るぞー。」

いひつて僕の川神学園での学校生活がまた始まる。

吸難、すたーじ。 (後書き)

微妙な感じで切れます。

風間フマキローまだクリスともゆきちよこせん。

## 第一話（前書き）

まじこいつでいいね。

特に百代姉貴がいい。ワン子と姉妹丼にしようか考案中。

## 第一話

「・・・全員いるな。では連絡事項を伝えるとしよう」

朝の恒例の出席を取り、担任の教師である小島梅子先生が連絡事項のプリントを配り、朝のH.Rは終わった。

プリントには人間測定についてであり、詳細が書かれていた。

「（・・・やはり、僕には合わない・・・）」を選んだのは間違いだつたな」

「あ、ねえ」

「・・・川神さん」

「もひ。なんで朝はすぐに行つたの？話をしたかったの？」

「・・・僕はしたくない」

朝に会つた川神さんが話しがけてきた。

川神さんは同じクラスで席も後ろにあるため、かなりの頻度で話しがけられる。

世話焼きの川神さんは何かと僕を気にかけるが僕は嬉しい。

「……も、僕と関わらないでくれ。僕は君も川神先輩も学長も嫌いなんだ」

「な、なんで？理由が知らないままじゃビリビリとかわからないよ」

「…………保健室に行く

話すのも嫌になり、教室から逃げるように保健室に行ってしまった。

「ちっ、またサボりかよあいつ

「なんであんなやつが川神さんと話してるか意味不明だし」

「根暗だから仕方ないんじやね？」

「ぎゅはははは！それ言えてるなー！」

「ワニ子……」

「…………話してくれないのかな？」

そんな声も聞こえないフリをして……。

僕は保健室にいる保険医の先生に許可をもらひて、ベッドを借りて横になつた。

「十六夜君、私はちよつと職員室に行くから。何かあれば呼んでね

？」

「はい・・・その時はお願ひします」

ちなみにだが、僕は体がかなり弱い。

昔に事故を起こしてからの後遺症なのか、背もあまり伸びず、成長が緩やかになつた上に筋肉も衰えてしまつていて。

そのせいか、貧血で倒れることがよくあり、保健医にも覚えられるほど保健室の常連になつてしているのだ。

ベッドに横になつたまま、イヤホンを耳に付けて音楽を聴きながら目を閉じることとした。

「・・・・・」

「あい。起きた？」

「先生・・・」

「貴方、朝から今までずっと寝ていたのよ。相変わらずなのね十六  
夜君」

「すいません・・・」

「ま、いいわ。今は昼休みだけど何か食べるかしら?」

「・・・教室に・・・弁当が・・・」

「ふふつ、これでしょ?川神一子さんが持ってきてくれたわよ?」

・・・また川神さんか・・・なんなんだあの人は。

まあ、持つてきてくれたならもう一つおこいつ。お礼だけはして・・・

「・・・ねえ」

「ん? なにかな?」

「なんで僕、ここにいるわけ? お礼をしようとしただけなのになんで無理矢理連れられるの?」

ブスツとした顔で僕を無理矢理誘拐した犯人、川神さんを睨む。弁当のおにぎりだけを食べて川神さんにお礼を言いに行つたらなぜか捕まつて屋上に来たわけなのだ。

屋上には川神さん以外にも何人か、風間ファミリーとかいう集まりの人達がいた。

「十六夜・・・だっけか? 僕は直江大和。よろしくな・・・思えば話すのははじめてだな」

「・・・・・十六夜蒼穹<sup>そら</sup>。蒼い穹と書いて蒼穹って呼ぶ

「いい名前じやん。あ、俺様は島津岳人。ガクトでいいぜ」

「僕は師岡卓也。モロって皆から呼ばれてるよ」

「・・・おい京」

「椎名京」

「お前なあ・・・」

「だつてこいつ、根暗みたいで嫌いだもん」

「ば、京!」

「いいよ。慣れてるから」

風間ファミリーの直江大和、島津岳人、師岡卓也、今はいないリーダーの風間翔一、川神一子、椎名京、そして川神百代。  
無理矢理ながら、友達にされることになった。

「そういうや、お前はよく保健室に行くけどサボりなのか?」

「ガクトーなにデリカシーのない事を聞いてんのよ!」

「これだから筋肉は」

そしてなぜか昼食に無理矢理付き合わされ、肩身狭いなんのって。  
・・・人付き合いは嫌いなのに。

島津岳人がなぜ僕が保健室に入り浸りなのか聞いてきて、他の面々  
から殴られている。

「でも気になるな。なんであんなじょひゅう行くんだ？」

「…………」

「大和まで一十六夜君、言わなくていいんだよ？」

「わうそつ。ガクトの戯言だと思つて。ね？」

川神さん、モロがそつ言つが話わう。話して僕から離れてもりおう。

「いいよ。話す」

「……聞いてなんだがいいのか？」

「別に。貴方達は知りたいから聞く。そりでしょ？なら話すしかないじやないか」

「それはそうだが……

（なんか気が狂うな。こいつのペースに呑まれるようだ）」

「僕は事故で体が弱くなつてね、大半は貧血で保健室に行つてゐるだけだよ」

そう言つと空気が重くなるのがわかり、全員が元凶であるガクトを睨むように見ていた。

本人は冷や汗流して明後日の方向を見ていた。

「・・・五年前の事故は知ってる?」

「五年前?」

「・・・もしかして海難事故か?客船が沈んで死亡、行方不明者がかなり出たやつだろ?それが・・・まさかお前・・・」

「そう。あの時の唯一の生き残りが僕なんだよ。直江君」

またもや、空気が重くなり、どう答えたらいかわからないような顔をしていた。

「・・・じゃあ僕は行くよ。できたらもう関わらないで」

そう言うと僕は立ち上がり、屋上から出て再び保健室に舞い戻ることにした。

担任の教師である小島先生からも許可をもらつてから大丈夫だろう。

五年前の海難事故。とある場所にて有名な豪華客船の招待状をもらい、僕は乗った。

最初は完成した豪華客船の記念に祝杯をしたりと騒いでいた。僕も楽しんでいたが、事件は起きた。

原因不明のガス爆発。

それにより、豪華客船の乗客はパニックになり、脱出をしようとす  
るが間に合わず全員死亡したというのが表向きである。  
実際は違う。僕は乗つていたからわかるが、あの時・・・脱出用の  
船に乗りうつと殺し合いをしたのが原因で脱出が間に合わなかつたの  
だ。

僕が助かつたのは離れていた場所にいたから、ガス爆発の爆風で頭  
を打つて氣絶していたから助かつたのだ。

頭を打つたせいで何が原因でガス爆発が起きたか忘れ、警察には何  
回も事情聴取されたけど。

「あら十六夜君」

「すいません。まだ気分が優れないのです・・・いいですか？」

「いいわよ。でもあんまり寝ていると出席日数ヤバくなるわよ？」

「・・・まあ、なんとかします」

「それより十六夜君・・・女装する気になつた？」

「断固拒否させてもらひます」

普段は前髪を貞子のようにたらして地味なイメージが持てるようこ  
しているが、僕の顔は中性っぽく、女装が似合つ童顔な容姿をして  
いるのである。

僕はこの容姿は嫌いなのだが、保険医の先生には大絶賛で女装させようとした論文でいる。

実際に僕の素顔を知るのは保険医の先生、小島先生、昔に知り合った揚羽さんだけである。

・・・揚羽さん、目が血走って怖かった。

「じゃあおやすみなさい」

「また家に送つてあげるからねっくら寝なさいな」

「・・・はい」

保険医の先生、名前は冴子先生とはプライベートでも付き合いがあり、海難事故直後のカウンセラーをしてくれた人もある。時たまに、寝ている僕を家に送つたりしてくれるのが、添い寝とかやめてほしい。

・・・出席日数、は大丈夫だけど授業があれだなあ・・・。

## 第一話（後書き）

体が弱いのは本人が思い込んでるだけ、実際はチートなボディーを持つあります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4155z/>

---

まじこい？他でやってください！

2011年12月15日22時52分発行